

# 地域での食農教育がもたらす人々のつながり

—農村と都市の事例から—

松江 良 (靄 理恵子ゼミナール)

## 論文の目次

- 第 1 章 はじめに
    - 第 1 節 研究動機
    - 第 2 節 研究目的
    - 第 3 節 論文の構成と研究方法
  - 第 2 章 先行研究の整理
    - 第 1 節 人々のつながり
    - 第 2 節 食農教育
    - 第 3 節 その他の用語の定義
  - 第 3 章 農村の事例「大村夢ファームシュシュ」
    - 第 1 節 長崎県大村市の歴史・概況
    - 第 2 節 調査地の選定理由
    - 第 3 節 調査結果
      - 第 1 項 大村夢ファームシュシュについて
      - 第 2 項 参与観察
      - 第 3 項 インタビュー調査
  - 第 4 章 都市の事例「ふらっとリビング」
    - 第 1 節 川崎市麻生区の歴史・概況
    - 第 2 節 調査対象の選定理由
    - 第 3 節 調査結果
      - 第 1 項 ふらっとリビングについて
      - 第 2 項 参与観察
      - 第 3 項 文献調査および構造化インタビュー
  - 第 5 章 考察
    - 第 1 節 継続的な食農教育
    - 第 2 節 農村と都市における人々のつながり
    - 第 3 節 食農教育を通してできたつながりがもたらす人々への影響
  - 第 6 章 おわりに
- 注

## 参考文献

### 参考 URL

## 1 はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

筆者は農村地域で生まれ育ち、生活をする中で食農に関わる機会が多くあった。その中で出会った人とは、一時的な関係で終わることなく、会った時には話をすることがよくあった。しかし都市部に住むようになり、はたして農があまり身近ではない都市の人々はどのようにして食農に関わっているのか、つながりはあるのかという疑問を持ったことから本研究を決めた。

本研究では、農村と都市それぞれの地域で企業や団体が主体となって行っている食農教育の事例を通じて、食農教育に関わる人々にどのような影響を与えているのかを考察するとともに、食農教育を通してできる人々のつながりの今後の展望を描くことを目的とする。

### 1.2 分析方法

「つながり」については鈴木 (2013) と秋谷・坂井・高梨 (2021) の研究を参考にして定義付けを行い、秋谷・坂井・高梨 (2021) によって論じられた「つながりの実感」というキーワードを用いて、フィールドワークや文献調査、インタビュー調査の結果からの考察を述べる。

「食農教育」については JA グループによる定義を用い、結城 (2005) が論じた食育の考え方を念頭に置きフィールドワークを行うこととする。そして、野田 (2009) が論じた学校教育における食農教育の問題点を踏まえ、前述の調査結果と合わせて、企業や団体が食農教育を行うこと

の意義について考察を述べる。

## 2 地元農家が設立した企業の食農教育—農村の事例—

長崎県にある「大村夢ファームシュシュ」は、地元農家らが地域農業の活性化を目的に有限会社シュシュを設立して経営している農業交流拠点である。

ここでは参与観察およびシュシュの直売所に農作物を出している一瀬啓司氏と有限会社シュシュの代表取締役社長の山口成美氏にインタビュー調査を行った。

調査の中で、シュシュができたことによって、直売所や体験教室などを通して利用者や地元の人々と農家、農家同士の交流機会が増えているということが分かった。この交流機会の増加は農家らの向上心を高めたり、利用者や地元の人々は活気ある農業やシュシュに魅力を感じ、食・農に対する関心を高めたりしていた。

また、シュシュが地域の小学校と連携して行う食農教育の一つに「お米アイス」がある。これは田植えから収穫まで行った後に、シュシュの加工場でアイスにして実際に販売を行う食農体験である。子どもたちが自分たちで育てたものをただ食べるだけでなく、販売して商品にもなるということを知ってもらい、より食・農に関心をもってもらうために考えた企画であった。

## 3 食農教育を通して地域とつながる—都市の事例—

川崎市麻生区で活動している「ふらっとリビング」は、代表の中村ふみよ氏の「まちとつながる機会をつくりたい」という思いをきっかけに始まり、これまでの自身の経験を生かして、食農教育や多世代交流の場を提供している団体である。

ここでは文献調査および5回のふらっとリビング参加における参与観察、中村氏へのインタビュー調査を行った。

継続的な食農教育が行われているふらっとリ

ビングでは、子どもたちの食・農に関する知識の定着が見られた。野菜の収穫体験では、中村氏がふらっとリビング以前の活動でつながった、麻生区で農家をしている飯草氏の畑でこれまでに何度も収穫体験をしていた。そのため、参加者の中には「前回の活動が楽しく、普段は畑が身近にないためこの機会に家族で収穫体験に参加をしており、前回の収穫体験後から農作物の産地を気にするようになった」という人もいた。

一方、これらの活動は子どもたちや親子の自主的な活動のため、食・農に関心がない人が入ってくることや継続することは難しく、人が固定化していることが課題点として挙げられた。

## 4 考察と結論

これらの調査から、企業や団体が主体となっていて行っている食農教育は、農村か都市かという違いを超えて、「継続的な食農教育による知識の定着」や「つながることを目的とした場所だからこそそのつながりの実感」、「農家を続けることの原動力」、「地産地消の意識変化」、「家庭内での共通の話題提供」、「地域を見る目」といった点で様々な人に影響を与えていると考えられる。

しかし、親同士や地域の大人同士がつながりを深める様子がほとんど見られなかったため、そのような場の提供をすることで、より一層の地域交流が望めるのではないかと期待する。

## 主要参考文献

秋谷直矩・坂井志織・高梨克也, 2021, 「「つながりの実感」を考える」『質的心理学フォーラム』13 p.5-12.

鈴木弘輝, 2013, 『つながりを探る社会学』NTT出版株式会社.

野田知子, 2009, 『実証 食農体験という場の力』社団法人 農山漁村文化協会.

結城登美雄, 2005, 「地域に大きな食卓をつくらう おばあちゃんの7万回の食事の知恵を生かして」, 農文協編『食育のすすめ方6つの視点・18のプラン』社団法人 農山漁村文化協会.